

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02434

研究課題名(和文)『詞律大成』の総合的研究

研究課題名(英文)A Study of "Shiritsu Taisei"

研究代表者

萩原 正樹 (HAGIWARA, MASAKI)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：20250532

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：森川竹ケイ(1869～1917)は、詞人として高く評価されるが、研究者としても『詞律大成』という詞譜を残している。『詞律大成』は、清・万樹の『詞律』を補訂する目的で著わされた書物であり、『詞律』には見えない詞牌や詞体を収めるほか、『詞律』の説を補強するような見解も見られ、竹ケイが多くの書物や作品を広く参照しながら編纂を進めたことが分かる。

『詞律大成』の優れた見解の中には、清・秦ケンの『詞繫』と一致する点がある。『詞繫』も『詞律大成』も、いずれも『詞律』の補訂を行おうとした書物であり、それが両著の説の暗合という結果を生んだのではないかと考えられる。以上のような点について研究を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、中国において「詞譜」や詞牌に関する研究が進んでいる。しかし『詞律大成』については中国はもちろん、日本においてもこれまでほとんど研究されておらず、その点で本研究は学術的意義を有している。

現代のようなコンピューターやデータベース等の無い時代において、森川竹ケイは自らのたゆまぬ努力によって膨大な資料を精査し、『詞律大成』という大著を完成させた。しかもその内容は、現代の研究水準から見ても相当に高度な内容を持つものであった。中国の学問や文学に最大の敬意を払い、身を削るようにして研究に取り組んだ先人の業績を知ることは、国境を越えた相互理解を考えるヒントになり、大きな社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：MORIKAWA CHIKUKEI (1869～1917) is appreciated as poet, and leaves Cipu (Anthology of Ci poems tunes) called "Shiritsu Taisei" as a researcher. "Shiritsu Taisei" is a book written for the purpose of correcting "Cilv" by WanShu, and it contains Cipai and Citi that are not visible, and there are views that reinforce the theory. It is revealed that pushed forward editing while CHIKUKEI refers to many books and works widely. Some of the great views of "Shiritsu Taisei" are in line with "Ciji" by QinYan of Qing Dynasty. Both "Ciji" and "Shiritsu Taisei" were the books that were trying to revise "Cilv", it is thought that it resulted in the consensus between the theory of both books.

研究分野：中国文学

キーワード：森川竹ケイ 詞譜 詞律大成 詞律 万樹 詞繫

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

森川竹磔(名鍵藏、字雲卿、1869~1917)は、神田喜一郎博士が『日本における中国文学』(『神田喜一郎全集』第七巻所収、同朋舎、1986)において「わが日本填詞史上に輝く唯一の專家である」と評されたごとく、日本では数少ない詞のすぐれた專家である。彼はまだ十代の頃から詞を作り、その生涯において六〇〇首余りの詞を残している。

詞人として多くの作品を残すとともに、彼はまた詞の研究にも力を注いだ。その講演録である「詞の沿革及び作法の概説」(『風絮』第12号所収、2015)は、当時としては最先端の詞の概説であり、日本はもちろん中国においてもこれだけまとまったかたちのものは稀であった。また久保天随とともに行った詞曲の合成調に関する議論などにも、彼の研究の水準の高さが示されている。

その竹磔畢生の大著が『詞律大成』である。だが『詞律大成』については、神田喜一郎博士が前掲書において「原稿は、すべて二十巻、それに大曲を録した『補遺』一卷とが全部完成してみたいが、『詩苑』が中絶したので、惜しいことに巻八までが刊出せられたに止つた。爾余の原稿がどうなつたか、今日では全く踪跡し得ない」と述べられ、その連載中断と原稿の散佚とを惜しまれて以降、正面から論じられることはほとんど無かつたのである。

『詞律大成』は「詞譜」である。「詞譜」とは、詞の曲調(詞牌)の名称、字数、句読、押韻、各句の平仄の排列などを明らかにしようとする書物であり、詞を作ろうとする人にとっては必携の書であるが、その編纂のためには無数と言って良いほどの作例を一つ一つ分析しなければならず膨大な時間と労力を要する。森川竹磔も二十余年の歳月を費やして『詞律大成』を完成させたのであるが、竹磔が亡くなったため残念ながら全二十巻補遺一卷のうち巻九の第十二葉で連載が終了し、その後の内容については不明のままである。

日本における詞譜としては田能村竹田の『填詞函譜』が最も著名であるが、『填詞函譜』は清・万樹の『詞律』や清・夏秉衡『歷朝詞選』の亜流でしかなく、現在においてはその詞譜としての価値は歴史的なものではない。だが『詞律大成』は残巻とはいえ、森川竹磔の実作者としての経験や真摯な研究の成果が示されており、その詞譜としての価値はきわめて高い。特に重要なのは、『詞律大成』が清・康熙帝勅撰の『欽定詞譜』(四十巻)を超克しているという点である。

竹磔は、『詞律大成』(「發凡」・「余論」)において、従来の詞譜に対する厳しい批判を展開している。批判の対象とするのは、杜文瀾『詞律校勘記』・『詞律補遺』、徐本立『詞律拾遺』、謝元淮『碎金詞譜』、そして『欽定詞譜』であり、特に『欽定詞譜』に対しては、すべて十項目にわたる徹底した批判を行なっている。

『欽定詞譜』は、「詞の詩型を調べるのにもっとも完備した書物」(京都大学漢籍善本叢書第十三巻『欽定詞譜』清水茂氏解説、同朋舎、1983)として、清代はもちろん現在においても高く評価されている。そのため、『欽定詞譜』の所説が無批判に研究に利用されている傾向が少なからず見受けられる。『欽定詞譜』は詞牌の研究にとって有用な書物ではあるが、誤解や遺漏も多く、その所説は今後詳細に再検討されなければならない。蔡国強『欽定詞譜考正』(華東師範大学出版社、2017)、田玉琪『北宋詞譜』(中華書局、2018)等は、こうした『欽定詞譜』再検討の成果である。森川竹磔の『欽定詞譜』批判は、こうした『欽定詞譜』再検討に際して、多くの示唆を我々に与えてくれるのである。

2. 研究の目的

本研究は、森川竹磔の遺著である『詞律大成』を、中国のさまざまな詞譜類と比較検討し、その歴史的な価値を広く内外に知らしめるとともに、その詞牌研究が現代においてもなおきわめてすぐれた水準にあることを明らかにすることを目的とする。

『詞律大成』は、明治の漢詩人として知られる森川竹磔が編纂した詞譜であり、おそらくは明治四十二年頃には完成し、明治四十四年十月から随鷗吟社の機関誌「随鷗集」に連載され、また後に大正二年十月からは竹磔が主宰した「詩苑」に連載された。残念ながら全二十巻のうちの第九巻第十二葉までしか残存していないが、きわめてすぐれた詞譜であり、これを過去や同時代の詞譜、またその後刊行されたさまざまな中国の詞譜と比較して、その詞譜としての優秀さを明らかにしたい。

3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するため、

- (1) 『詞律大成』所収詞牌の研究
- (2) 『詞律大成』の所説と他の詞譜との比較研究
- (3) 『詞律大成』未刊部分に関する研究

の順に研究を進めた。

(1) については、『詞律大成』に収録されている詞牌のすべてについて一つずつ調査を行い、その詞体をどのように同定したか、また異体としてどのような詞体を選んでいるかなどについて、その妥当性を検討していった。竹磔は多くの作品を比較対照しながら『詞律大成』を編纂したのであるが、竹磔が生存していた当時には知られておらず、その後唐宋金元代の作品として認められたものも数多くある。竹磔にそれらの作品に対する言及や考察がなかったのは当然であるが、今回はそうした作品も含めて竹磔の諸説の妥当性を検証していった。また『詞律大成』「發凡」を再検討することにより、『詞律大成』の編纂方針についても検討した。

(2)については、『詞律大成』と他の詞譜との比較を行った。『詞律大成』は、清・万樹の『詞律』を補訂しようという意図で編纂された書物であり、まず最初に万樹『詞律』との比較を行う。また『詞律』以後の詞譜である、康熙帝勅撰『欽定詞譜』や秦嶺『詞繫』、また『詞律大成』と同じく『詞律』を補訂しようという目的で執筆された『厲評詞律』『詞律校勘記』『詞律補遺』『詞律拾遺』等と比較し、それらに対する『詞律大成』の独自性や、共通点等について検討を行った。

(3)については、『詞律大成』未刊部分にどのような詞牌が収録されていた可能性があるかについて検討する。これについては竹磔の実作品にどのような詞牌や詞体が用いられているかなどや、竹磔の他の書物における詞牌・詞譜関係の発言等を調査することで、可能な限り明らかにする。

4. 研究成果

(1) 『詞律大成』所収詞牌の研究

『詞律大成』は、「発凡」において「万氏詞律所収者六百五十九調、一千一百七十三体。今所刪者十二調、一百十二体、所補者一百九十六調、六百三十五体。凡所録者八百四十三調、一千六百九十六体(万氏詞律の収むる所の者は六百五十九調、一千一百七十三体。今刪る所の者は十二調、一百十二体にして、補う所の者は一百九十六調、六百三十五体なり。凡そ録する所の者八百四十三調、一千六百九十六体)」と述べられているように、すべて843調、1696体の詞牌・詞体を収録している。これは詞牌数から言えば『欽定詞譜』の826調を上回っており、当時最大の詞譜であった。第九巻の十三頁以降を見ることができず、現存の『詞律大成』では342調しか確認できないのが惜しまれるが、それでもその規模の大きさの片鱗は窺うことができる。

収録している詞牌や詞体は万樹『詞律』に収録されているものが基礎となっていることは当然であるが、詞牌では「楼心月」「鶯声繞紅楼」「清平令」「杏花天影」「中腔令」の五調、また詞体では「醉太平」の高麗史樂志無名氏詞四十六字体、「雨中花令」李之儀詞四十八字体と五十字体、「雨中花慢」の趙長卿詞九十七字体、「歸田樂」の仇遠詞六十七字体、「望遠行」の孫惟信詞七十五字体の五調六体が『詞律』に見えないばかりか、『欽定詞譜』『詞律拾遺』『詞律補遺』のいずれにも見えない。詞牌「楼心月」と「鶯声繞紅楼」については、清・張德瀛『詞徵』(巻一「詞律拾遺」)に「然其中有尙補而不補者、如韓滉弄花雨、姜夔鶯声繞紅楼、無名氏楼心月、張翥丹鳳吟、張雨茅山峰故人、此当列入補調」と見えるが、『詞徵』の初刊は民国11(1922)年であり、竹磔がこれを参照することはありえない。すなわちこの五調の詞牌と五調六体の詞体とは、竹磔が独自の研究によって見出したものなのである。

こうした独自の見解が優れているほかに、既に万樹が取り上げているものについても竹磔は厳密な校訂を行っている。たとえば『詞律』巻一に収録されている詞牌「塞孤」について、万樹はこれが前後段に分かれる双調の作だとし、前段末句は「漸西風緊、襟袖淒裂。」後段末句は「免鴛衾・兩恁虚設。」と比定するが、前段末句が八字、後段末句が七字となっていて、前段の「漸西風緊」の「緊」字は衍字ではないかと述べている。これに対して『詞律大成』はそれぞれ「漸西風・襟袖淒裂。」「免鴛衾・兩恁虚設。」に作り、万樹説を肯定するかたちで記載しているが、これはなにも万樹説に盲従したわけではない。『詞律大成』の注記に「参朱雍詞」と示されているように、南宋・朱雍に「塞孤 次柳耆卿韻」詞があり、それを参照すると前後段の末尾はいずれも「三・四」という句式になっており、竹磔はこれによって「塞孤」の句式を決定したのである。

竹磔は「発凡」において、『詞律』の排列や体裁、また万樹の説などに変更を加える場合は「皆一一註明之」と述べており、非常に厳密な態度で『詞律』に臨んでいる。万樹の説に従う場合においても、他の資料を確認するなど、そうした厳密な態度で編集を行っているのである。

(2) 『詞律大成』の所説と他の詞譜との比較研究

『詞律大成』は、上にも記したように『詞律』の影響を強く受けており、『詞律』に対して最大の敬意を払っているが、『詞律』の中の誤った言説についてはきちんと批判している。たとえば「紅情」「緑意」について、竹磔は「発凡」において「張炎山中白雲詞、紅情緑意詞自序云、疎影暗香、姜白石為梅著語、因易之曰紅情緑意、以荷花荷葉詠之。万氏未見之、故於疎影調下、喋喋弁之。凡如此類、他亦不為少、今皆削其細註(張炎の山中白雲詞、紅情緑意詞の自序に云う、疎影暗香は、姜白石梅の為に語を著す、因りて之を易えて紅情緑意と曰い、荷花荷葉を以て之を詠ずと。万氏未だ之を見ず、故に疎影の調下に於て、喋喋として之を弁ず。凡そ此くの如きの類、他も亦た少しと為さず、今皆な其の細註を削る)」と述べ、万樹が張炎詞の自序を見ずに、誰が姜夔の「疎影」「暗香」を「紅情」「緑意」に改作したか分からないと述べている点を鋭く批判している。こうした万樹の謬説を正すという点も、『詞律大成』の優れた一面である。

また『詞律大成』の所説を検討してみると、清・秦嶺の『詞繫』(二十四巻、道光末年)の説と符合する部分が多く見られる。『詞繫』は、中華民国になってから発見されたもので、多くの詞学者は1996年に北京師範大学出版社からその活版本が出版されるまでは存在も知らなかったものであり、当然竹磔も『詞繫』のことは知らなかった。だが先に挙げた「塞孤」について、『詞繫』も竹磔と同じく「漸西風・襟袖淒裂。」「免鴛衾・兩恁虚設。」に作り、「西風下、詞律多緊字、以緊襟二字音相近、疑緊字為羨。朱雍和詞作向亭臯、一任風裂、是緊字果為羨也(西風の下、詞律は緊字多きも、緊襟の二字音相近きを以て、緊字の羨たるを疑う。朱雍の和詞は「向亭臯、一任風裂」に作り、是れ緊字果して羨と為すなり)」と述べて、朱雍の和詞が「向亭臯・一任風裂」

と作ることを根拠に『詞律』の「緊」字を衍字とする説を支持しており、竹磔の説と暗に符合している。こうした両著の一致した見解は他にも見えており、非常に興味深い。『詞繫』は、『詞律』を「詞学の功臣」だとして高く評価する一方、また「欠失」もあると論じて、『詞律』の補訂を行おうとした書物であり、その点で『詞律大成』と性格の似た書物であると言える。そうした『詞律』補訂という共通した目的を持っていたことが、両著の説の暗合という結果を生んだのではないかと考えられる。

(3) 『詞律大成』未刊部分に関する研究と今後の展開

この点については、特に『詞繫』との比較を通じて現在も研究を進めている。上に記した「塞孤」の例のように、『詞律大成』も『詞繫』も柳永の詞体の校訂において、朱雍の和詞を用いている。『詞律』巻二十「笛家」についても、『詞繫』は『詞律』の分段を支持しているが、これもおそらくは朱雍の和詞を参照して得たものと考えられる。「笛家」は『詞律大成』未刊部分に収められており、その説を確かめることはできないが、『詞繫』の結論と同様の見解であったのではないだろうか。

和詞に関しては、竹磔は「発凡」で「如楊沢民統和清真詞、余断以為楊未見清真集、只倚方千里和詞作之。故方詞之訛錯、楊皆襲之。至陳允平和清真詞、則隨讀隨填之跡、歷歷見之（楊沢民の統和清真詞の如きは、余断じて以為らく楊は未だ清真集を見ず、只だ方千里の和詞に倚りて之を作ると。故に方詞の訛錯は、楊皆な之を襲う。陳允平の和清真詞に至りては、則ち隨讀隨填の跡、歷歷として之を見る）」と述べ、楊沢民と陳允平に対して非常に厳しい見解を示している。楊沢民と陳允平の和清真詞について、鞏本棟『唱和詩詞研究 以唐宋為中心』（中華書局、2013）等ではこうした見解は見られず、詞の韻律を研究した竹磔ならではの見解であろう。こうした観点についても今後研究を進め、未刊部分について可能な限り明らかにしていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 萩原正樹	4. 巻 1
2. 論文標題 《和曼叔原小山楽府》探論	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 南開詩学	6. 最初と最後の頁 72 - 92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 萩原正樹	4. 巻 69
2. 論文標題 小泉盗泉と詞	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学林	6. 最初と最後の頁 88 - 109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 萩原正樹	4. 巻 664
2. 論文標題 鷹取岳陽年譜補訂稿	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 530 - 540
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 萩原正樹	4. 巻 64
2. 論文標題 森槐南的詞学 關於詞的起源	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 成大中文学報	6. 最初と最後の頁 1 - 20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 秋原正樹	4. 巻 65
2. 論文標題 森川竹ケイ年譜補訂	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 学林	6. 最初と最後の頁 82 - 116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 秋原正樹
2. 発表標題 鷹取岳陽年譜補訂稿
3. 学会等名 「明治大正期日中韓文人詩詞交流研究」国際学会会議 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 秋原正樹・詹千慧
2. 発表標題 日本漢学的研究現状
3. 学会等名 上海大学文学院講演会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 秋原正樹・詹千慧
2. 発表標題 日本近年来的詞学研究和日中詞学交流
3. 学会等名 江蘇師範大学文学院講演会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 秋原正樹・詹千慧
2. 発表標題 日本詞学的研究現状
3. 学会等名 上海大学文学院講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 秋原正樹
2. 発表標題 森槐南の詞学 詞の起源について
3. 学会等名 第五回東亜漢籍交流国際学術会議（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 秋原正樹
2. 発表標題 《和晏叔原小山楽府》小考
3. 学会等名 東亜漢学国際学術研討会（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 秋原正樹
2. 発表標題 詞牌「鵲橋仙」について
3. 学会等名 中国芸文研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 王兆鵬、萩原正樹・松尾肇子・池田智幸監訳	4. 発行年 2019年
2. 出版社 朋友書店	5. 総ページ数 609
3. 書名 宋代文学伝播原論 宋代の文学はいかに伝わったか	

1. 著者名 東 英寿、内山 精也、浅見 洋二、萩原 正樹、中本 大	4. 発行年 2018年
2. 出版社 中国書店	5. 総ページ数 368
3. 書名 宋人文集の編纂と伝承	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----